家族の思いに寄せた在宅生活に向けて、移乗の介助方法を検討した脳出血症例 公益財団法人脳血管研究所 附属美原記念病院 リハビリテーション科 大塚 光

[はじめに]右被殻出血により重度左片麻痺・高次脳機能障害を呈した症例を担当した。 家族の思いを考慮し、妻介助での車椅子移乗動作獲得に向け、福祉用具の選定・家族 指導を中心にアプローチしたため以下に報告する。

[事例紹介] 50 歳代男性。現病歴] Y 月 Z 日右被設出血の診断。Z+93 日 VP シャント術施行。Z+128 日 当院回復期リハビリ病棟入院。併存疾患慢性骨髄性白血病(抗癌剤内服)。既往歴左第1趾靱帯損傷、成人スティル病。病前生活妻・娘と3人暮らし、ADL自立。家屋状況屋内は敷居等なく、車椅子が通れる廊下幅あり・敷居なし。本人の発言「車椅子乗る、桜みたい」。妻の思い今上がっている能力を落としたくない。車椅子に乗って一緒に食卓を囲みたい。休みの日は起こしてあげたい。

[作業療法評価] 意識 JCS2 コミュニケーション極簡単なコミュニケーション可能 身体 機能 左片麻痺 BRS II - II - II 高次脳機能 観察上、注意・認知機能低下、左 USN あり。基本動作端座位: 頭頸部の正中位保持困難で立ち直り反応みられず重度介助要す。移乗: 重度介助、右上肢で支持物把持すると右上肢で突っ張り、左側への姿勢崩れ著明。

ADLF I M 23/126 点 (運動 13 点、認知 10 点)、経管栄養 耐久性 普通型車椅子使用し 30 分連続乗車可能。 介助方法に対する妻の意向 症例の能力を活かした方法で実施したい。 リフターは自宅では使いたくない。

[問題点]移乗動作に重度介助が必要であり、妻の介助では移乗動作が困難である。 [目標]リフター以外の福祉用具を使用し、妻介助で車椅子へ移乗できる。

[妻の移乗介助獲得に向けた介入内容]①福祉用具の検討:リフター以外でも、妻介助で安全に行なえる移乗方法の検討。②家族指導:移乗方法を決定したうえで実際に妻が行なえるよう指導。

[介入経過]①症例の身体機能、移乗動作の安全面を考慮し、0Tで3種類の介助方法を提案。実際に症例本人と妻を交えて比較検討した。結果、使用感をもとにトランスファーボードを選択した。②トランスファーボードを使用した家族指導実施。随時セラピストの援助が必要な状態から、セラピスト見守り下で妻の介助で可能となったが、退院後、妻一人で移乗することに対して不安が残存した。

[最終評価] 一般状況自発話増加高次脳機能 MMSE6/30 基本動作 端座位: 支持物使用し

極短時間監視。
| 移乗介助 妻介助で可能であるも、転倒や転倒後の対応に不安あり。| ADL 食事:楽しみ程度の経口摂取可能。| 耐久性 普通車椅子使用し 1 時間程度連続乗車可能。 [考察] 症例は移乗動作に重度介助を要しており、妻が安全に移乗の介助を行なう方法として、0T はリフターが最も適していると考えた。そのため、妻に対して提案したが「リフター以外を使用したい」という意向であった。その背景には、症例本人の「機能を維持させたい」という妻の思いがあった。そのため、移乗の介助方法を再検討した。宇都宮は、自己決定支援において「本人・家族にとって最善となる選択肢を見いだすための調整役」が必要であると述べている。妻の意向を最大限考慮し 0T が専門職の立場から実現可能な選択肢を提示し、自己決定を支援していくことが必要であると考える。自己決定に結びついた一方で、妻は移乗の介助に対して不安が残った。今回の症例においては、環境面や本人と妻の体格差等、身体機能・安全面以外においての多面的な評価が不足していたと考える。さらに「身体機能を維持させたい」という思いがあったことを考えると、身体機能を維持するための代替案の提案や地域の関係職種を交え、患者・家族の思いを共有し引き継ぎを行うことが必要であったと考える。

[参考文献]

1) 宇都宮宏子: 退院支援ガイドブック、第 3 版、株式会社学研メディカル秀潤社、東京、2016